

●座談会

# いま“豊かさ”とは

## 働き方・ライフスタイルを見直す・問い直す

●ノンフィクション作家

今 崎 暁 巳

●小豆沢病院院長

芹 沢 憲 一

●一橋大学教授

富 沢 賢 治

●司会・編集部

●豊かさとはなにか  
豊かさのイメージ  
“遊びを通してみた日本と  
イタリア”  
生活の質をつくる主体  
豊かさをどうつくっていくか  
豊かさへの道筋

司会 今日座談会は、まず一つの柱として、豊かさとは何か、ということとそれぞれの先生方の関心や問題意識で明らかにしていただき、そして、その豊かさというものはどうやったら実現できるか、ということをもう一つの柱として進めていきたいと思えます。

さて、本誌の新年号で、連合の登山会長と統一労組懇の引間さんとに、連合の発足、階級的ナショナルセンターの確立の方向という新しい情勢のなかで労働運動はどうあるべきか、それぞれ対談をしていただいたわけです。そのなかで、たいへん乱暴なくくり方になるかもしれませんが、両方とも共通して、生活の質の向上を目標として掲げておられた。経済同友会なども、年頭見解で「国民の需要は、今、クオリティ・オブ・ライフを求めて大きく変わろうとしている」というとか、後ほど紹介しますが、雑誌『ミセス』が豊かさの特集をしたり、朝日新聞が、それをめぐって投書特集をしたりしています。いわば日本中が「生活の質の向上」ということを問題にしている。つまり世界的にGNP大国になったり、経営のいい方でいえば賃金が、世界のレベルだ、世界一の債権国だ

というなかで、これからもつばら争いは生活の質なんだという。豊かさがいたるところに問題として出てきているように思うわけです。

今崎さんに、生活の向上というのは何かを問う連載を、本誌でやっていただいておりますが、本日は、「生活の質の向上、あるいは豊かさと何なのか」ということを、それぞれの先生方のご専門の立場から明らかにしていただきたいと思えます。

実際、労働法から見ても、たとえば時短一つ取り上げても物理的な時間の量の規制ということは言っています。しかし働き方なり労働の質、生活の総合的なとらえ方ということ、労働法制にも労働運動にもなかったのではないかと。実に狭い労使関係でのみ物事を考えてきている。「賃上げ株式会社」の運動はやったけれども、地域なり生活、家庭の場も含めた総合的な発想はなかったのではないかと。

そこで生活の質の向上、豊かさとは何なのかを、先生方からお話しいただいたうえで討論に入りたいと思います。今崎さんから口火を切ってください、豊かさとは何か、をめぐって典型的なお話をご紹介します。ただけたらと思えます。

# 豊かさとはなにか

- 豊かさのイメージ
- 遊びを通してみた日本とイタリア
- 生活の質をつくる主体

## 豊かさのイメージ

豊かさについて考えているところを話したいと思います。

## 二つの指標

今崎 日本での暮らし方のなかで、

いま提起されたように誰もが豊かさ、を求めているはずなのだけれども、GNPの数字は上がったにもかかわらず、実感としてわれわれには豊かさがない。他方、ヨーロッパではGNPは低いけれども、日本とは違った状況があると言われてきた。そこで、何がいったい違うのかを確かめるために私もイタリアに三年続けて行ってみたということです。そこで私の見てきたものと合わせて、

一つは、本誌の連載の第一回目にも書いたのですが、NHKが「世界の中の日本」シリーズのなかで、日本の進むべき道ということで三つの道を挙げた。アメリカの道、香港の道、最後にイタリアの道がその三つですが、そこで提起されたテーマが、時間の豊かさということ、部屋の広さの問題、お金がかからないことを含めて、医療が完備しているという三つが挙げられてきたのです。が、私自身の感じからいっても、いちばんトップに言われた時間の豊かさというところに、もっとも大きな興味を持っています。

## ●時間の豊かさとはなにか

時間の豊かさということでは、日

本人は働き過ぎと言われるように、労働時間がやたらに長い。私の知っている大企業の社員などは、ウィークデーの場合、一二時まで働くのがあたりまえみたいになっている。そういう人がかえって大企業ほどいるという状況があります。働き過ぎということとは、ほかの時間はほとんどない、遊びどころか家族といっしょに暮らすこともないということですから、そういう意味で、一日の時間、一週間の時間、一年の時間のなかで暮らしていくうえでのいろいろな要素の一つひとつを経験すること、日本人は限りなく貧しくなっているという感じがしています。

その点で、まずポイントが二つくらいあるという気がしています。一つは、いま言ったように、一日二四時間のうち、家族とも出会い、何か好きなことを友達ともいっしょにやる。日本以外の先進資本主義国ではだいたいそういうふうになっている。日本でもこれから、当然、そういう方向に行くのではないかと、自分自身の希望も含めて私は思っています。

日本ではいま実態はそうなっていないのですが、たとえばその考え方のなかに余暇という言葉の問題があ

ると思います。余暇という言葉は明治維新以後、翻訳のなから作られた言葉だと思うのですが、余暇という言葉は、余りの暇、ですから、日本人には本来の意味で時間を豊かにという発想がない。最初からある意味では意識操作されていて、生活を充実していく、時間を大事にするということはまったく欠落させられてきたのではないか。これは明治維新以後の、働け、働け、という状況のなかで作られてきたのだと思います。が、その問題がまずある。

たとえばイタリアに行くとき、実際につきりするのですが、生活の要素としては、働くこと、食べること、人と会うということ、遊ぶこと、それから、楽しみながら同時に何か作り出すことなどがある。そういう五つぐらいの要素を、毎日、人間はやっている。暮らしのなかでぜひ、それを確立したいと思います。

## ●人と人とのつながりの豊かさ

二番目は、労働の時間はちよつと別として、それ以外の時間を豊かに使うということは、別の言い方をすれば、人と何かするということだと思ふのです。つまり、人と人とのつながり、というのがその中身だとい

うことです。家族にしても、イタリ  
アでいえば人民の家へ行ってだけか  
といっしょに何かやるにしても、み  
んな人とながっている。もちろん  
一人で山へ登るといふことだつてあ  
りますが、それも含めて、人間が人  
自然との出会いのなかで何かする。  
ここが実は、文化論でも大事な点だ  
と思います。

いろいろな文化論がありますが、  
私にとって文化を問題にするときに  
いちばん大事なことは、人と人との  
つながりです。人間が原始時代から  
現代まで、農耕から始まって、生活  
を作り出してきた歴史を見ていくと、  
やっぱり文化にとっていちばん大事  
なのは、人と人とながるといふ  
ことだと思えます。そこが文化の良  
さで、いちばん欠けてはいけない特  
質をそこに見る必要があります。

例として一つだけ言っておきます  
と、たとえばコンピューター、ハイ  
テクの発達した日本の文化生活など  
といういわれかたをしますね。テレ  
ビが一人一台あって、受験勉強もブ  
ラウン管を通してやれば先生は要ら  
ないとか、あるいは音楽だつて演奏  
会に行つて生の音楽を聴くのではな  
くて、時間がないからというこゝで  
機械的に音楽を聴いて、それで音楽

を聴くということになっている。し  
かし音楽というのは音の楽しみのほ  
ずです。つまり演奏家が汗を流しな  
がら一生懸命演奏するのを、こちら  
側が受けて聴く、聴く人と弾く人が  
まさにそこにあることで、成り立っ  
ているのが音楽だと思ふのです。

だから、機械の面で非常に進歩し  
てきて、人と人とのつながりをむし  
ろ断ち切るほうが、いい文化の状況  
のように日本では言われているけれ  
ども、車があつて、コンピューター  
ですべてを処理してということを極  
度に詰めていくと、文化の大切な要  
素、人と人とのつながりがなくなつ  
てくるわけです。この二つのことを  
私は申し上げたいと思います。

### 自分がやりたいことが 生き生きとできる生活

司会 二つのことを柱にして豊か  
さということを見ていきたいという  
ご指摘ですが、芹沢先生、何があれ  
ば豊かなのか、何がなければ生活は貧  
しいのか、先生が普段お考えになつ  
ていることをご紹介いただけますか。

●ストレス性職業病の発生  
芹沢 東京で整形外科をやつてお

りまして、いろいろな職業病に取り  
組まされてきました。肩凝り、で  
あるとか、腰の痛み、であるとかは、  
医学界でも機械的な重量物の負荷が  
原因であると、今まではとらえられ、  
理解されてきましたし、私自身も大  
学で習ったことはそうでした。ここ  
ろが職場へ入つていってよく調べて

いきますと、どうも昔の腰痛や肩凝  
りとは、年齢のうえでも起こり方の  
問題でも、発生の仕方が変わつてき  
ている。これらについて、単純な  
筋肉負荷説と、そうではなく、神  
経を含めた、精神的な要素を含めた  
負荷だ、という意見があつたわけ  
ですが、率直にいいますと、私自身は  
整形外科ですから、むしろ筋肉負荷  
説のほうを最初は信じていたわけ  
です。しかしどうもそれでは理解でき  
ない状況が発生してきています。

いわゆる「合理化」が進んでいく  
なかで労働がどうなつていくかをず  
つと調べていきますと、やはり労働  
密度が非常に強くなつてきています。  
機械と毎日ならめっこして、しかも  
神経集中を極度に要求される。それ  
から生活リズムの問題として、夜間  
作業が増えている。印刷工場だつて、  
昔はあまり夜間作業はなかつたと思  
うのですが、新聞以外の印刷物でも

夜間作業が増えている。交通関係は  
とくにそれがひどい。それからもう  
一つ、労務管理の強化があります。  
そのことによつて、職場の民主主義  
が破壊され、今崎先生がおっしゃつ  
たような、非人間的な職場の環境に  
なつて、人間関係が変わつてきてい  
る。

腰痛、肩凝りの問題から現場へ入  
つていって、そういうことを非常に  
感じてきたわけです。ですから、治  
療にしても今までの整形外科的な手  
法では治らない。このことは労働者  
も言っています。どこの大学病院へ  
行つても治らない、と。たとえば朝  
日新聞が、東京オリンピック当時、  
高速輪転機を入れたことによつて、  
輪転職場で腰痛が多発したのですが、  
大学病院の整形外科にかかつて、  
ちつとも治らない。「先生、悪いけ  
ど整形外科には行かないよ」と朝日  
新聞の労働者に言われたのを、今で  
も覚えています。そのような疾患を  
「過労性疾患」という概念でくる  
のですが、やさしくいえば「身も心  
も疲れ果てた」ということです。決  
して身だけではなくて、心も疲れ果  
てるという生理学を頭に入れておか  
ないと、今の職場の健康は見られな  
いのだということを強く感じてきた

のです。

そういうことがあります。治療をどういうふうに進めればいいのかというのが、臨床医としての課題となったわけです。たまたまその当時、杏林大学の土畑鉄之丞助教授(当時)と学会でユーゴへ行っていたのですが、そのついでに社会医学研究会というのがイタリアを視察するというので、私もいっしょについて行ったのです。

ところが、ついでに行ったイタリアの生活を見て、「これだ」という感じがものすごくしたわけです。ともかく明るい。『マンジャール・カンターレ・アマール』(食って歌を歌って恋をする)という三つの国民的信条。そういう国情のなかで、フィアットの労働者とかいろいろな人たちとつき合ってきたわけです。

これは富沢先生のご専門ですが、イタリアは健康の問題でも大変な取り組みをやっていた時期です。工場の危険地区とかを職場ごとに作って、それを経年的にどうやって減らしていくかという金属の削いなどがやられていました。

そういうなかで、向こうの三大労組調査登録センターへ行き、わが国での頸肩腕障害の説明を上畑さんと

一生懸命やったことがあります。ところが全然通じない。つまり「ストレスによって起こってくる疾病がいま日本では多発している。イタリアにはないか」と質問したのですが、「それはどういう病気だ」と問いつ返される始末です。それで一生懸命説明して、通訳に三〇分ぐらいかかって、やっと「わかった」と言った。

「自分の気に食わない仕事をやることによって起こってくる疾病か」と。「そうだ」と言ったら、その次に「われわれの国には、自分が嫌で嫌でしょうがない職業に就くやつはいない」と言われた。(笑) そんなことを言っているのは、日本の労働者はどこへ行っても仕事はないだろうと思えますが、そういう意味で、本当に自分の言いたいことが貫かれている社会なのですね。

さきほど今崎先生は、時間の豊かさ、人と人との出会いの豊かさ、ということをいわれましたが、私が帰りながらいちばん感じたのは、日本の「本音とたてまえ」ということです。日本人はだいたい職場ではたてまえでしか働いていない。家へ帰ると本音でやるから、家のなかで逆

非常に波風がたつというか、家でしかわがままが言えない感じというのは、みんなが持っていると思えます。ところが向こうはずっと本音を言いますよね。そういう意味で、今崎先生は非常にうまくまとめられたのですが、私は生活を楽しむことが大事だと思えます。

それが文化についてですが、イタリアはルネッサンスを経てきて、民主主義が確立しているという感じ

だったので、日本の労働組合の学習会で文化の問題というと、みんなわからない。笑い話ですが、文化の日の前に、総理府の労働組合で学習会をやったのです。そこで「文化の日の主管官庁である総理府の労働者が、まさか文化的生活というのがわからないこととはないと思えますが、では文化的生活というのは何だと思えますか」という質問をしたら、だれも手が挙がらない。文化的生活というとわか

らなくなってしまうのです。それで、私は健康対策としては、「頭をリラックスすること、運動すること」を挙げるのですが、そうするとみんなそれはレクリエーションかと言う。レクリエーションという理解までできますと、その次に出てく

るのは、必ず、いい年をして今さらレクリエーションでもないということとです。そういう労働者が圧倒的です。ところがレクリエーションをやっているのはだいたい若い年代で、そんなのにうつつを抜かしているやつは遊び人で、そういうことは言わないのが日本のまじめな労働者、まじめな人間像ということになっているのです。

そういうとらえ方をされると、学習会での言い方が難しくなる。どうも「遊び」というのは罪悪感を伴わないと出てこない。こうなると、労働者のなかに直接、遊びを権利としてとらえるという考え方を真っ正面からぶつけないといけないという考え方もつようになり、人間らしい生活という意味で、遊び、ということ

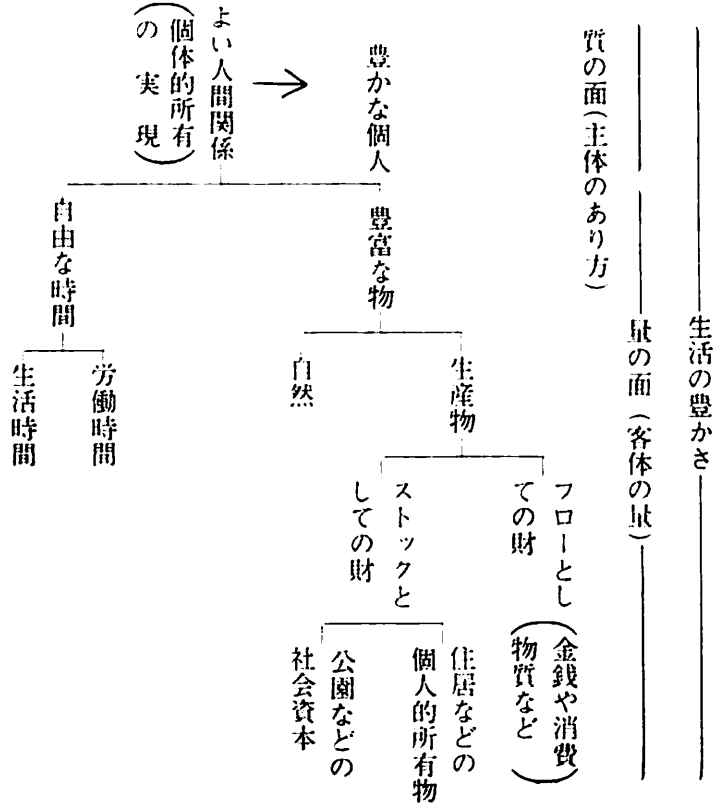
を言っているのです。私は、文化生活というのは、「自分がやりたいことが生き生きとできる生活」という規定がわかりやすいのではないかと思います。

ストレスの多い日常で、職場では自然発生的にパチンコ屋、一杯飲み屋通いが非常に多いわけですが、日本の労働者にたっぷり余裕があって、たっぷり金があって、なおかつパチンコ屋と一杯飲み屋にいくだけなら、

「頭をリラックスすること、運動すること」を挙げるのですが、そうするとみんなそれはレクリエーションかと言う。レクリエーションという理解までできますと、その次に出てくるのは、必ず、いい年をして今さらレクリエーションでもないということとです。そういう労働者が圧倒的です。ところがレクリエーションをやっているのはだいたい若い年代で、そんなのにうつつを抜かしているやつは遊び人で、そういうことは言わないのが日本のまじめな労働者、まじめな人間像ということになっているのです。

●豊かさの方程式

- ① 生活の豊かさ⇨よい人間関係+豊富な物+自由な時間
- ② 生活の豊かさの構造



豊かさの方程式

司会 文化生活とは「自分がやり

たいことをのびのびとやることだ」とすると、働き方の問題を含めて、富沢先生のご専門の労働運動との関係ではどうでしょうか。

日本の労働者の文化水準は低いと言わなければならない。しかし、いまの状態では、職場で毎日毎日起こってくるストレスをどうやってとるかという点、それ以外に方法がないという意味で理解していけば、今後の労働運動としてはもう少し別の展望が出なければいけないのではないかと感じます。

●物や時間を自由に使う

富沢 いまこちらにくる電車のなかで、豊かさの方程式、というのを考えてきました。これは、あなたの豊かさの程度をチェックするテストにもなるし、豊かな生活をつくるために労働運動がどれだけ努力しているかというテストにもなると思うのですが、上図が、その方程式です。

①については説明の必要はないと思います。②は①の内容を構造として吟味したものです。これについて説明させて下さい。

まず、人間自身が豊かになるといふことが豊かさの基本だと思います。そして、主体としての自分が豊かになるための条件としていろいろな客体がある。豊かさを主体・客体関係でとらえる必要があると思うのです。

現状を見ると、客体が豊かなこと、つまり、お金があつて生活物資が豊かなことが豊かさだと受け取られているけれども、実はこれは主体である人間が豊かであるための客体的な条件だととらえないといけない。主体と客体を逆転するとおかしくなってしまうのではないかと、このことを第一に言いたいのです。

客体的としては、基本的に物と時間があります。まず物のほうですが、これをフローとストックと自然とに分けて考えたいと思います。基本的には自然が豊かでないといけない。ストックとしては住まいなどの個人的な所有物、それから公園とか道路とか上下水道などの社会資本があります。そしてフローとしては、日常的に消費していくような消費物資とか、あるいはお金とか、そういうものがあります。

時間のほうは、労働時間と生活時間に分けてみましたが、これはさらに細分化できると思います。こういう物と時間がどれだけ量的に豊かであるかということが、人間が豊かである条件を測るための一つのものさしになるのではないかと。

つぎに主体との関係ですが、生活の質を向上させるといった場合の、質の面では、いま今崎さんも芹沢先生もおっしゃったように、物とか時間が自由に使える、つまり自分のものとして使えるということが基本的に重要になると思います。ですから労働時間にしろ生活時間にしろ、自分のものである、自由に使えるということが大事です。労働に関して言えば、労働が、他人から押しつけられた強制労働ではなく、どれだけ自分の労働になっているかということが、労働時間の質的な面でのチェック

クの基準になると思います。  
生活時間も、今まで言われたよう  
に、たんなる余暇ということ、ゴ  
ロゴ寝るのではなくて、その生活  
時間で何をするか、その時間を自由  
に生き生きと使っているかどうか。

それが質的な面での問題になってく  
るのではないか。こういうふうにか  
えてみました。こんなものさしをた  
たき台にして考えていくと、豊かさ  
がある程度、量的にも質的にも測れ  
るのではないかと思います。

### ●よい人間関係にもとづく個体的所有

それからさらに付け加えますと、  
物や時間を自由に使う、つまり自分  
のものにするといった場合には、そ  
れを各人がそれぞれ自分のものだ  
と排他的に囲い込んでしまおうとなか  
かうまくいかない。もちろん個人  
が持つべきものもありますが、すべ  
てを個人が持とうとするとうまく  
いかない。そうしますと、どうして  
も人と人との関係というところが重  
要になってくると思います。つまり  
人と人との関係をうまく保って、客  
体を共同で所有する。かたちは共同  
だけれども、中身からいうと自分が  
個人として自由に使えるというかた  
ちになっていくことが必要です。こ

れを私は「よい人間関係にもとづく  
個体的所有の実現」と表現したいと  
思います。

このように考えてきますと、いま  
今崎さんも芹沢先生もおっしゃった  
ように、人と人との関係ということ  
が、生活の質を問う場合に、非常  
重要になってくる。

とりあえず非常に抽象的にいいま  
すと、こんなものさしになるのでは  
ないか。労働運動も、生活の質の向  
上を要求する場合には、「豊かな物  
」の獲得だけではなく、「よい人間関  
係」にも十分目くばりをして、生活  
について総合的に考える必要があり  
ます。「豊かな生活」「豊かな人間  
」をつくる労働運動を、私は「人づく  
りとしての労働運動」と表現してい  
ますが、このような要求をもった労  
働運動は今後ますます重要になっ  
ていくのではないのでしょうか。

### ●遊びを通してみた 日本とイタリア

司会 実はこの座談会を企画しよ  
うと思つて、ちょっと振り返つてみ  
たら、朝日新聞が一月六日と七日に、  
「豊かさとは何か」という投書の特

集をやっていました。たとえば手づ  
くりであるとか、人間関係を生活の  
なかで豊かに持つことがキーだとか、  
時間のゆとりということもずいぶん  
と出ています。抽象的に心にゆとり  
とか、心の時代とか言っているけれ  
ども、それでごまかされたのでは困  
るのであつて、いま各先生が言われ  
たように、「自由に時間をのびのび  
と使う」、あるいは「自分のやりた  
いことをのびのびとやる」、あるい  
は、「そのことをとおして人と人と  
がつながる」ということなのだろう  
と思います。

また、はじめに紹介したように、  
一〇〇人のご婦人に「豊かさ。つ  
て何だろう」というアンケートを  
『ミセス』が行なったり、一月二二  
日に発表された「新経済計画の基本  
的考え方と検討の方向」（経済審議  
会）も「豊かさを実感できる国民生  
活の実現」という項目を立てていま  
す。これには後日談があつて、こ  
の答申の時間短縮などをめぐつて議  
論した自民党内で、「日本人はこれ  
からは、二宮尊徳をやめて、お原庄  
助になれということか」（つまり遊  
んで暮らせということか）という批  
判が相次いだ、ということだが……、  
庄助さん型への転換は時代の要請に

沿う」といった趣旨の社説を朝日新  
聞がかかげたりして、ライフスタイ  
ルの変化、考え方の変化を主張して  
いるのですがね、いかがですか……。

### 遊ぶことに罪の意識

司会 芹沢先生、以前ウニタ祭に  
行かれた際、日本の大学の遊びの専  
門家が二日目に遊びくたびれちゃっ  
たという話がありましたね。

芹沢 社会体育の専門家の先生、  
つまりレクリエーションとか、遊び  
が必要だとかねが主張されている  
先生とご一緒だったので。洋上ウ  
ニタ祭で行ったのですが、ジェノバ  
からエーゲ海まで七日間、イタリア  
の人たちといっしょに船旅をしまし  
た。向こうの生活ですから、船の上  
で朝起きて、朝飯が九時か一〇時、  
昼飯が一時から二時の間、おやつが  
三時から四時ぐらいの間、それから  
八時から一〇時ごろまで晩飯を食っ  
ているのです。終わるとバーへ行つ  
て一二時までいて、終わると今度は  
ナイトクラブへいって朝まで踊つて  
いる。一一時にはまた夜食が出るか  
ら合計五食です。  
そういう生活をやっていたら、三  
日目の朝でしたか、船室で起きたら、

「先生、これでいいんですかね」と言うので、「何を言っているんです、先生。日本のレクリエーションの専門家じゃないですか」と冷やかしたことがある（笑）。しかし、それは日本人の実感だと思のです。

**司会** ウニタ祭が終わって帰ってきて、船を降りてくたびれきっていたのは日本人たちだった。遊び過ぎてくたびれちゃったんですね。

**芹沢** 向こうの連中は、遊ぶと楽になるといのがあたりまえなのです。われわれもそうなのですが、一週間船旅をして帰ってきてみたら、みんな船のロビーで横になっていた。どうも日本人は遊んでくると疲れるのです。（笑）イタリアの連中は、横になるといのはだいたい体の調子が悪いときだから、心配しちゃうで、「どうしたんだ、どうしたんだ、起きろ、起きろ、おれたちはこれからスペインにドライブに行くんだ」と言うのですが、日本の連中はみんな横になっている。病気だと思われましましたね。

### 人間らしい生活のための賃金 —最低賃金でも食えるが……

**芹沢** このことに関しては、『赤

旗』に報道されたのですが、全国一般の中部地域支部の人たちが「最低賃金制で暮らせるか」という実験をやりました。自身の四人の労働者を選んで、いま日本で決まっている最低賃金でおまはいくらだ、これで一カ月暮らせ、というものです。そしてその一カ月の収支と食事内容と日記を書かせた。

組合がそれを病院へ持ってきて、食い物はこれで十分かという分析をやってくれというので、栄養士に分析をやらせました。そうしたら、栄養士の答えは栄養的には十分だ、ただ、食い方に思慮が足りない、うどんを食うのも、そこへ卵一個落とすともうちよつと栄養があるものになるというものでした。最低賃金制で、栄養学的な生存というの十分だということが、逆に出てきたのです。組合のほうは、たぶん最低賃金制でいくと、食うや食わずでやせるのではないかとという予測があったのでしよう。

ところがここで大事ななのは日記のほうです。問題は日記のほうに出てきた。つまり二月にスキーに行く予約をしていたのだけれども、実験の対象者に選ばれた、ところがスキーの費用を出すとそれだけで最低賃金

が大幅に減ってしまう、それでスキーをやめるわけです。そうすると、日記に、今ごろ連中は滑っているだろう、という記述が出てくる。それから、会社から帰るときに、みんなが飲みに行こうときそうのですが、これも予算を考えると、今日は勘弁してくれといって帰るしかない。ビールが飲みたいのではなく、今ごろ連中は飲んでいるだろうな、というところが、日記には綿々とつづられているわけです。そこでストレスがたまる。

音楽会が好きで音楽会に行きたいけれども、それも行けない。無料の招待券をもらったというので、やっつと音楽会に行った感想が非常に生き生きと書かれている。

それらを見てみんなで討議をしたのですが、最低賃金制というのは生物学的存在の条件としては満たしているのではないかと、ところがそういう生活であると、人づき合いとかが遊びに行ったり音楽会に行ったりということができない。それがむしろ日記のほうに非常に重要な問題として出てきている。だから、「食える賃金をよこせ」というのは戦後のスローガンだ、今は「人間らしく生きられる賃金をよこせ」というべきだ

という議論をしたのです。豊かさというのはどこいらへんにあるかという意味で、あの実験はいへん大きな意味を持ったのではないかと思えます。

**富沢** 休養というのは、日本人にとっては休むことだけれども、イタリア人にとってはその時間を利用していろいろやることですね。

**芹沢** そうです。そこで、私は医学的に言うとお大事に」という言葉の階級性というか、日本的な意味を考えましたね。だいたい「お大事に」というと、布団を敷いて寝ていればいいということでしょう。ところが向こうの人に「お大事に」というと——まだ言ったことがないので、今度やってみようかと思うのですが——違うと思うのです。そういう生活に対する考え方が決定的に違う。

富沢先生はいま条件を言われたのですが、そういう条件はずつとそろってきても、主体のほうにそれがなると困る。社会的に言うと、老後の家を建てなければならぬから貯金が世界でちばん多いというのはありますね。

それともう一つ、頭の中で遊ぶことが罪悪感を伴っているということがあると思うのです。有給休暇が労

働基準法で定められていても、これを、自分が本当に人間らしく生きるために使うという権利意識は、日本の労働者のなかにはきわめて少ないのではない。だからだいたい、法事であるとか、おじさんの何回忌であるとか、そういう理由をくつつけないと有給休暇が取れないという実態がありますね。それでそつとスキ一に行くとか、ゴルフに行くとかね(笑)。

そのようなところに主体としての問題、日本の特徴というものがあつたのではないかという感じがします。

### 生活を楽しむ工夫

**司会** そこで今崎さんの奥さんによると、仕事人間じゃいけないとおっしゃるご自身が、主人は仕事が終わるそうになるとイライラしてくる、という話もあるのですが、イタリアなどではどうなのでしょう。主体のほうから生活を楽しんでいるという点で、見てきた実態をちょっと紹介してください。

### ●遊びはしんどいか

**今崎** いま芹沢先生は、芹沢先生およびお医者さん方がイタリアへい

らっしゃった時のお話をされたのですが、お医者さんは労働時間が大変だということも一方ではありませんが、少なくとも日本人のなかでは自由度のある方たちのはずなのに、向こうの習慣に合わせるとなると、いきなり行ったのでは疲れる。たとえば一年ぐらいイタリアにいれば、そうでもなくなるということもあるのではないかとも思います。

イタリアでは普通の勤労者でも、労働時間は六時間であれ八時間であつて、働いて、そのあと食事をして、「人民の家」などにそのあと八時から九時ぐらいから集まり、楽しむわけですね。

日本の場合、実態調査にもあるように通勤時間の平均は一時間三〇分ですから、五時に仕事を終えて、家に帰って六時に食事をして、八時に出かけるということはできない状況にある。だからまったく観念的になつてしまうのですが、しかしかりに早く帰宅できるようにしたとして、家でシャワーを浴びて食事をして、そのあとまた外へ出ていってスポーツをやるとか映画を見るとかするだろうか、そういう生活のリズムなり、発想があるだろうか。今の日本だと、これも疲れるということになるから、

ゴロ寝して一杯飲むということになるだろうと思います。

イタリアではそのことがまさに楽しさになっていて、毎晩行かないとつまらない。つまり、それは働くこととまったく違った楽しさであると同時に、筋肉も神経も違った使い方をするとということで、逆に疲れも回復して、翌日のエネルギーが出てくる。まさにそうなのでありますが、そのへんで、日本人とイタリア人が本質的に違うのかどうか。

だから要求の身としては、今後、日本でも休みを増やしていくということになっていきますが、その際に現実問題として、遊びがしんどい、という価値観を持っていたのではどうしようもない。

### ●人民の家の変化

確かに遊んでいけば楽しくなるのです。ところが、そのからみ合いがうまくいっていない。イタリア人だつてそのへんは工夫しているのですよ、実は。

一つお話ししたいのは、人民の家はかつてはレジスタンスをくぐった五五歳から上の人たちが、言ってみれば地域の意識的なリーダーたちが集まる場所でした。共産党があつたり、

キリスト教民主党があつたり、いろいろな人たちが話し合う場であり、ワインを飲みながらですから、日本よりは政治の話だつてリラックスしていたでしょうが、それでもリーダー集団の集まりの場所だつた。彼ら自身もそう言っています。

年間総実労働時間の国際比較 (製造業、生産労働者) (時間)

年	日本	アメリカ	イギリス	フランス	西ドイツ
1975	2,043	1,888	1,923	1,830	1,678
1978	2,137	1,924	1,955	1,772	1,719
1981	2,146	1,888	1,910	1,717	1,656
1982	2,136	1,841	1,915	1,683	1,626
1983	2,152	1,898	1,938	1,657	1,613
1984	2,180	1,934	1,941	1,649	1,652
対象事業所規模	5人以上	全事業所	10人以上	10人以上	10人以上

出所) 1983年までの数字は、労働省賃金福祉部企画課推計

1984年の数字は、労働省の推計方法に基づき勤余暇開発センターで推計したもの。



それがここ数年の間に、リーダーに限らず、すべての老若男女が毎晩遊ぶ場所が変わってきている。三年前に行ったときと去年行ったときでもずいぶん変わっている。地域の人が行って遊ぶにしても、工夫によって、急速に人民の家自身がここ数年の間に変わってきている。

ポロニーヤのある人民の家の場合、三年前は、中高年が多くて、若者も婦人もいないという状態だった。ところが、建物は四階建ての同じものなのですが、二年の間に中身が変わっている。いちばん典型的なのは、三〇〇人ぐらい入るホールがあったのですが、三年前に行ったときには、そこは机や椅子が並んでいて、リーダーたちが学習するという感じだった。日本でも労働者の学習会という夜集まってやる。それと似たような雰囲気、当時は何かものすごく殺風景な感じがした。やはり人が来ていなかったのですね。ところが二年たって行ってみたら、その部屋そのものが非常につややかに、床も光を放っている。よく見たらステージが作られて、グラントピアノがある。そして今度の土曜日にはオーケストラのだけそれ来るなんて書いてあるのです。

聞いてみたら一週間のうち水曜と土曜、日曜の三日間を社交ダンスの夜にしている。それまでは五〇代以上しか集まらなかったのが、こうすることによって（二〇代はまだロックでない）だめな面があるのだけれども（三〇代以上が集まる。とくに土曜日の生伴奏のときには三〇〇人が集まる。ポロニーヤに人民の家は九〇ある——だいたい六、七〇〇〇人に一つの人民の家がある——）ということですから、その一つひとつに三〇〇人の男女が集まることになる。とにかく毎週三日ずつ続けて、一年間たったら、なんと日本円にして五〇〇万円のお金を作り出しているのです。

だから、遊ぶことで会費を出して、楽しみながらそういう地域の仕事の機会も作り出す。要するに、建物もあるけれども、そこを人間のネットワーク、やりたいことでつなぐ。その企画を立ててつないでいる間、つまり二年間ぐらいの間に、まさに建物と人間が結びつきながら、自分たちの楽しさを作り出すことが行なわれた。

その部屋一つとってもそうでしたが、一階のホールもそうですし、地下に一〇〇席ぐらいの小さなホール

があるので、そこは若者たちが集まるような、ミュージカルからさまざまなパフォーマンスができるような機能を備えたものにするとか、それから体育館も、エアロビクスに柔道、サッカーなど自由にできるようにしている。すべての層の要求に焦点を合わせて、三〇代は三〇代、二〇代はいま言ったようなことを含めてやっている。

だから二年たって行ってびっくりしたことは、その一階のホールの前にオートバイを八台ぐらい置いて、二〇代から一〇代にかけての連中がうろうろしていたことです。つまり地域のなかで人が集まるようになってくると、今までだどこか公園の隅で集まっていたような若者が集まってくるのです。

だから、集まってイベントのように何かするというのも大事だけれども、やはり人が集まるといふこと、あそこへ行ったらだれかいるという空間広場、場があることですね。

今のところ、日本ではたとえ建物はあっても、人が集まらないという問題があります。企画を立てる側も、地域のなかで本当の意味で人と人とのつながりを考えなければならぬ。イタリアでもこうした工夫がされ

なかった。それまではどうやってたかというところ、お年寄りには夜は自分の部屋に入ってテレビを見ているとか、子どもは音楽を聴いているとか、日本と同じ状況だった。それを外へ引き出していく。三〇代のリーダーたちが中心になってとりくむ。政治や学習も大事なけれども、要は楽しむ、毎晩、好きなことをやる。中身は、人それぞれで、ダンスでも、カードでも、ビリヤードでも、なかには地域の遺跡の研究をする先生と子どものサークルもある。大切なことは、スポーツであれゲームであれ、あるいは芝居、研究活動であれ、その人の仕事とちがう別のやりたいことをやる。それが仕事の疲れをいやし、別の能力や感性を豊かに発揮させ、夜がまた楽しく創造的な時間になるわけです。

司会 なるほど。イタリア人もそうした時間の使い方を工夫して創り出したというわけですね。

今崎 ええ。日本人も教育勅語体制や高度成長時代の「働け働け」政策でそうされてきただけで、働くことが好きで、楽しく生きることがキライだなんてことはありませんよ。これからの工夫だと思います。

## ●生活の質をつくる主体

司会 それはだれがイニシアチブをとるのですか。労働運動、市民運動、日本でいえばそういうことになるでしょう。まず今崎先生に、つづいて富沢先生にお聞きしたいのですが、労働運動の伝統的テーマのなかに、たとえば時短ということはあるとしても、組織されたサークルでも労働運動でも、遊びということが入っていないかと思うのですが。

### 自治—みずからの参加

今崎 人民の家も数年前までは人が集まらなくなっていたのです。労働者も職場のなかでなかなか集まりにくい状況が出てきていた。二〇代が地域に帰ってきてても行く場所がない。失業の問題があったし、若者がどこか来るような場所を作らなければいけない。これは向こうの諸団体、労働組合にとっても大変な問題だった。アルチという組織ができたりしたのも、そのような問題があったからでした。一九六八年ぐらいから

「熱い秋論争」というかたちで、職場だけではなくて地域で何をやるかということについての大変な議論があったのです。まず労働組合が提起し、諸団体がいっしょにやった。だからいまの到達点は、やはり二〇年近い議論のなかから出てきたのです。その結果として、人民の家の性格の変化がここ数年の間で起こった。つまり、簡単にいうと、エリート集団ではなくて、すべての人が自分をパフォーマンスする場所というふうになり、人民の家の中身を変えたわけです。去年行ったとき、アルチの説明を聞いてびっくりしたことがあるのです。この点は本誌の第二回めの連載の原稿には引用していますが、アルチの中身ですごいことをやっているのです。いま一〇のことをやっているますとやっているのですが、いくつかを紹介すると、いちばん最初に挙げたのは反核です。日本でも朝日新聞が一面に取り上げましたが、反核の国民投票をやったでしょう。政府も自治体も住民の合意なしには原発に財政支出できなくなるという画期的な国民投票。あれのきわめて特徴的なことは、自分たちの環境、自治権から見ると、原子力開発を含めて核をわれわれは拒否するというのが、

八五%ぐらいの大変な高率であったことでしょう。それも、①政府が自治体の合意なしに原発をつくれるか、②原発を受け入れた自治体に財政援助ができるか、③電力公社が外国の原発の建設・管理に参加した場合に財政援助ができるか、という三項目のそれぞれにイエスカノーで答えるというような決め方をしたのは世界でも初めてではないかと思えます。自然と同時に、核などに対する住民の側の運動の具体化が、まずそういうかたちで出ていた。

それから、ゼロ歳から一八歳までの子どもたちの学習の時間以外の自由時間をどうするかという問題です。アルチの青年や大人たちが、夏休みだとか普通の日の午後をどう過ごすかということの本気で考えている。つぎは生協運動とからんでくるのですが、食品をめぐる生活をどういう質にするかということ。自宅での料理も含めて、たとえばレストランがどんな食事を提供すればいいかということとまで考える。これはアルチコーラの運動と言っていました。それから男女平等によって、男性と女性の間でどういう暮らし方をするかということ。これはわれわれ日本の男性にとってきわめて重要だと

思います。男の労働後の時間をどう使うかが焦点です。これは、メディア・アルチ・ノーバという言い方をしています。つまり大人の自由時間の使い方をどうするか。

だから人民の家の質が変わってきただということなども、実はこのこととの関係があるのです。日本の場合だつて、いま週休二日制になったら男はどうやって過ごしていいかわからないという問題がある。その問題がアルチの太い項目になっています。

それ以外には、スポーツだとか狩猟だともあります。狩猟をやっていきますと自然保護とぶつかるわけです。しかし同時に、一方では環境を守るということと調和しながら、やっぱり狩猟という伝統的なスポーツを大事にする。もう一つというと、新しいことではゲイの人たちの人権を守っていくとか、そういうことがあります。

これを全部つなげていくと実はつきりすることは、生活の質を作り出していくということが、職場、家庭、地域、学校をつないで、暮らしの質を作り出していくということになっていく。さきほど言われたように、労働時間短縮という量の問題の中に中身を作り出すということをやって

いるのだと思うのです。

こうして見ますと、アルチなどが第二のルネッサンスと言われる理由がわかってくる。第一のルネッサンスのときは、ダ・ヴィンチの絵だとか、そういうすぐれた芸術を鑑賞させていただくというのが、庶民のかわり方だったと思うのですが、第二のという意味は、一人ひとりが全員参加するのが文化だということだ。文化というのは自分がやるのだという表現、それが実にはつきりしている。だから鑑賞者だけなんていうことはありえない。

ですから、人民の家は、毎晩プロだろうとアマだろうと、自分のやりたいことにとりくむ場所になっている。

### 労働運動のイニシアティブ

**司会** 伝統的な労働運動からいうと、富沢先生は前から狭い労使関係ではなくて、生活を丸ごととらえろ。とか、「人をつくっていくんだ」とか、労働運動はまさにいちばん基本になる人づくりもやるんだとおっしゃっています。今のようなことではどうですか。

### ●遊ぶことの権利

**富沢** 今のこととのつながりです。一つは芹沢先生がおっしゃった、遊びに罪悪感が伴うということ、これは何とかしないと運動にならないのではないかと思うのです。罪になることを運動にするわけにはいかないでしょう。正義の御旗は立てられないですからね(笑)。「遊ぶことの権利」といいますか、生活のなかにはいろいろな要素があると思います。そのなかに遊びも入れて、遊びも自分のものにする。さきほど今崎さんが言われたように、一人ひとりのものにしていくということをしなさいといけません。

つまり時間を労働時間と余暇とに分けてしまうと、労働時間が基本であって、あとはみんな残りの時間という感覚になるからまずい。生活時間部分にいろいろな要素がある。人とつき合う要素もあれば、地域づくりの活動の要素もあれば、政治活動の要素もある。そのなかの一つに遊びの要素がある。遊びも、もしどうしても正義の御旗を掲げなければ、レクリエーション、つまりレクリエーションをするための活動だと、とらえればいいでしょう。自動車のハンドルの遊びと同じで、遊びがなかつ

たら事故につながりかねませんよ。もっとも、ハンドルの遊びもありすぎては危いですがね。いずれにしても、そういう適当な遊びということ、生活要素の基本的ななかに、必要な部分として入れるという認識がないと運動にならないということが、一つあると思います。

### ●定年を早める要求

#### 生涯リズムを考える

それからもう一つ、今崎さん、芹沢先生のお話を聞いていて面白いなと思ったのですが、生活のリズムということが、日本人の感覚とイタリ

ア人の感覚とは違うのではないかという気がしてきました。つまり、われわれの生活のリズムというと二四時間、一日でとらえるわけですね。お日さまの感覚でいくわけでしょう。

それだけではなくて、年間の生活のリズムというのが、イタリア人にはあるのではないか。つまり働くときにはワーツと働く。遊ぶときには一週間でも一〇日でも船に乗ってのんびりする。それもレクリエーションとしてあって、それが働きというものに連動している。

そういう感覚がなくて、いつも二四時間感覚でいくと、二日、三日、

全然働かないと、何か生活のリズムがくずれてきて、落ち着かなくなつて、脳疲労を起こす、腰痛になる(笑)。こういうことになると思うのです。

それから、そういう一日のリズム、年間リズムのほかに生涯リズムがあると思います。たとえば、日本では定年延長が要求になるのですが、むこうの労働組合は、社会保障の充実を前提にして、定年をできるだけ早くという要求になる。むこうの人たちは生涯のうちで若いときはワーツと働いて、定年後はまるつきり好きなことをやる。

この間、イギリスに行つて面白いなと思つたことがあります。レイバ・リサーチ・デパートメントという組織があつて、労働経済や労働運動についてのいろいろな統計資料を集めて、雑誌を出しているのです。そこへ行つたところが、ある部門の部屋に行つたら働いている人が二人います。一人は背が高い人で、一人は背が低い。背の高い人は貴族なのです。背の低い人はパン職人をやつていた、たたき上げの労働者で、共産党の人なのです。もう一人は共産党かどうかは聞きませんでした。左の人です。

すね。

それから社会の破壊にかんしてい  
えば、社会では人と人とのつながり  
が基本だと思ふのですが、地域社会  
にしる家族のなかでにしろ、人間関  
係が非常に稀薄化してきている。そ  
れがいろいろな問題を生んでいる。

三番目は、そういうことを基本に  
して、人間のあり方、人間性とい  
うか、ヒューマンネイチャーとい  
うか、そういうものがおかしくなっ  
てきています。

そういういろいろな問題、つまり  
自然の破壊、社会の破壊、人間性の  
破壊といふところから生ずる問題は、  
賃上げだけでは解決できない。そう  
いうかたちで、労働者の生活のなか  
に社会問題として出てきている。個  
々の労働者をとれば、このような問  
題をどう解決していったらよいのか  
という欲求が生活欲求として、いろ  
いろなかたちで出てきています。そ  
の欲求を労働運動側がきちんととら  
えて、正当な要求、社会的な要求と  
して明確にかたちづくっていくこと、  
つまり労働者の生活状態の変化、欲  
求の変化をとらえて、それを要求に  
高めて、運動に組織していくことが、  
労働運動として重要ではないか。こ  
のように思います。

### ●労働者生活の変化 —高度成長を境に

労働運動のことでいえば、生活の  
あり方、つまり古典的に考えて、勞  
働者の生活状態を基礎にして労働運  
動を組み立てていくということと言  
いますと、労働者の生活のあり方は、  
高度成長期とそれ以降とはかなり  
違ってきている。これをとらえない  
と、運動のあり方についての反省は  
生まれてこないと思います。高度成  
長期というのはものすごいインフレ  
期ですから、どうしても賃上げをや  
っていかないと生活を防衛できない  
ということ、賃上げ中心、運動の  
ほとんどの部分が賃上げでしたね。  
今の高度成長後の時期においては、  
それだけでは生活が守れない。つま  
り家計防衛だけでは、生活の基本的  
なところがくずれてしまうという状  
態になっている。

家計防衛、賃上げはもちろん労働  
運動にとって非常に重要です。「賃  
上げから生活の質の向上へ」という  
スローガンがありますが、あれはま  
さにごまかします。購買力平価から  
見れば、まだ欧米に追いついていな  
いわけですからね。そういう意味あ  
いで賃上げが重要だということを、  
まず基本においたうえでいいたいの

二人ともいっしょに仕事をしてい  
るのですが、パン職人をやっていた  
人は、定年後にそこへ行って、無給  
で、週に二日とか三日、そういう活  
動をやっているわけです。それで年  
金生活をしている。その活動が自分  
の生きがいというか、生活になっ  
ているわけです。彼の生活のとらえ方  
のなかには、やはり生涯を通じての  
生活リズムを考えて、そういう生活  
設計があるのではないかと思うので  
す。

ところが日本の場合は、労働運動  
をやっているときはワークとやって  
いて、労働運動で定年になるとい  
うか、若い活動家を育てなければなら  
ないからというような理由で、ある  
時点でやめてしまうと、運動からス  
ポットと切れてしまったりするでしょ  
う。そうすると、今度はなにもしな  
いことからストレスがたまって脳疲  
労を起こしてしまう(笑)。

やはり生活のリズムというものを  
二四時間単位、一年単位、生涯単位  
で考えて、そのなかの所要所に遊  
びと活動を入れていく。そういう感  
覚でとらえないと、生活の質から  
ませての遊びと活動の運動化ができ  
ないと思います。

## 豊かさのきざしをつくりていくか

●豊かさづくりの核は  
●豊かさへの道筋

### ●豊かさづくりの核は

司会 豊かさ。を現実にするにはどうしたらいいかということに、もう入ってきていると思いますが、先ほどから話されていることは、人間がばらばらにされて、その日暮らして展望がないということが出てきているかと思えます。しかしそうしたことが激しくなればなるほど、それを克服する新しい動きがいっぱい出てきていると思うのです。そのへんで、それぞれの先生方から、危機感をこえて新しい建設をしていくご提案——こういうことをやっていけばどうかというお話に移らせていただきますかと思えます。

### 新しい行動の芽

今崎 これまでは労働運動がいろいろな運動を作りだしてきたけれども、今中心の舞台だったわけでしょうし、今のところ労働運動が何となく見えなくなってきた感じがあります。また、ぜひともそうあって欲しい。あらためてきょう、言われたようなこと、生活の質を作っていくという労働運動をぜひやってほしいと思うのです。

しかしもう一つ、労働組合運動だけではなくて、日本の地域生活なり、あるいは学校なども含めて見ていくと、さきほど富沢先生の言われたような人間性まで破壊されるような状況のなかから、やむにやまれず、い

ろいろな新しい行動が、ここ一〇年ぐらいの間、とくに石油ショック以来、起こってきていますね。それは芹沢先生もヨーロッパと比較してお感じになったと思うのです。

ヨーロッパでは日本みたいに荒廃はこれほどひどくないから、逆に言うとかえってそんな運動はないのだけれども、日本では日本特産の荒廃のなかで、いろいろなことへの抵抗と同時に、新しいものを作っていくような運動が起こっている。

具体的に、たとえば子育てに關していうと学童保育の運動があります。どこからもお金が出たわけではないのに、まさにお母さんたちが働きたがらとりくんできて、だんだん父親も参加していった。あれはヨーロッパにはない運動だろうと思います。

それから二番目に、生協運動などというの、まさに食べ物ですからいちばんわかりやすい。これはヨーロッパでは一九世紀以来やっていまから、男性が協同組合運動もやるしかけになっているのです。生産協同も、消費者協同も同じで、主婦は商品を消費するというところで役割を果たしている。ところが日本の生協運動は、組織から商品づくりまで主婦がやっている。いま一二〇〇万世

帯のおやじも子どもも引っぱり込んで、ダイナミックな運動になってきた。このことは、幸か不幸か、両面の意味があるだろうと思うのです。そこまで主婦自身が、ある意味ではおやじがやることも背負って、地域から運動を起こしてきたといえるように思います。

そしてもう一つ精神的なことと言くと、子ども劇場みたいな運動もあります。映画にしても芝居にしても荒廃してきて、プロの人がいくらがんばっていたってわれわれの見る機会が少なくなっている。そこを何とかしようということ、子どもといっしょに、福岡の団地の奥さんたちが始めた。それぞれ、学童保育も五〇万、子ども劇場も五〇万ぐらいの大変な運動になってきています。

さきほど富沢先生がおっしゃったように、各労働運動の分野の方たちに、遊びと暮らしを豊かにする、生活の質をとということを、職場から地域、家庭に目を広げてやってほしい。それと主婦や地域の老人や障害者も含めて、地域からここの数年の間に起こってきたような運動を一つにつないでいくようなことをしてほしい。そこで生活の質、価値観をうんと議論してもらって、すぐい

タリアのまねをするということではないでしょうから、日本で必要な運動をぜひやっていただきたいと思えます。

### 健康づくりのとりくみ

**司会** 中年以上の人たちの持つている関心としては、健康ということが第一の関心事ということでしょう。

健康づくりの運動の動きはどのようなでしょう。

#### ●本音の運動を

**芹沢** いま今崎先生がおっしゃったのですが、日本の現在の状況に対して、いろいろな動きは出ていると思うのです。いま運動の問題でいろいろ言われたわけですが、健康の問題でも、衰えを意識した人たち、たとえばジョギングのグループを作るとか、そういうことはあります。朝、地域の公園に行くと、走っている人とか、お年寄りで歩いている人とか、お年寄りが増えてきています。ただ、日本はそういうのが、社会運動、政治運動、労働運動ではまったくプランの上に乗っかっていないのですよ。

ともかく職場がきつくなってきた

いる。だからストレスをとるという自然発生的なものとしては、一つはほかのものに集中することによってストレスをとるわけです。いちばんとりやすいのがギャンブルです。勝つたか負けたかというところに集中することによって、雑念をとっていく効果がある。これがパチンコ、マージャンという格好で、社会的に流行してきているわけです。

そういう意味では、たとえば劇画、活字から絵へ変化してきたという問題も、実は職場の機械化と合理化という問題と軌を一にしながら進んできています。要するに長いものを活字で読むという精神的な状態がくずれてきている。それで週刊誌を大きな文字で読んで、たわいもないことを見ていく。

ただ、総じていえるのは、さきほどの富沢先生の方程式のなかでも、共同所有という言い方をされていましたが、日本では儒教の影響か、「みんなだ」という考え方が非常に少ない。それから非常にあきらめがいい。だから、本来、労働運動も政治運動もそうだと思うのですが、自分がやりたいこと、つまり本音で生きられる生活を作るためにこそ存在している運動なのに、いつの間にか運動そ

のものが本音から離れていって、たまたまだけが残って、苦しみばかり多くなってきた。それはやはり日本的な特徴なのだろうと思えます。

だから、本音でいく部分、自然発生的な反応をよく見ると、そのなかには確かに一定の変化は出ている。それから今崎先生の言われたように、やはり組織的に解決していこうという格好での運動も、私は日本のなかに十分あるのではないかと思っております。

ただ、私は「遊び、遊び」と言っているのですが、正しく表現すれば、人間らしい生活を作るといふことの、権利としての定着が、日本では決定的に少ない。これを権利と心得ている人はほとんどいないでしょう。アンケート調査をやったときに、自分の名前を出さないときにはわりと本音で答えてくるのですが、労働運動だ、だいたい本音の要求なんていうのは出てこない。春闘要求で要求をまとめたなんていったって、あれは相当、たてまえばかりで、本音の要求ではない部分が多い。

そういう意味では、憲法第二五条に、「健康にして文化的な最低限の生活」という条項がありますが、ずっと戦後見ている、あれが利用され

てくるのは生活保護基準の闘いのときだけで、ほかではなかなか浮かび上がってこない。だから「最低限の生活」というのは、生活保護基準を守るための憲法条項ではなくて、われわれが本当に生き生きと生活することを目的とする条項なのではないか。イタリアではまさに憲法などを抜きにしてそれが出てきているという感じですね。

#### ●人民の家の変化をつくったもの

さきほど今崎先生が人民の家について言われたのですが、あまり活発でない人民の家もあります。つまり非常に伸びているところ、相当意識的にやっているところもあるけれども、そうでないところもある。私はつくづく思ったのですが、イタリアの活動家の人たちの意識はすごいんですね。これは政党も含めてだと思うのですが、ちょうど私が一九八〇年にイタリアのポローニャに行ったときの話です。駅が爆破されて日本人が一人殺されたとか、ローマの共産党の地区委員会が爆破されたとか、テロが非常にはやった時代があった。人びとは夜、飯を食ってから外へ出て飲みながらしゃべっていたわけ

すけれども、出てこなくなった時期がある。そのときの活動家の人たちの意識に私は非常に感心したのですが、みんな飯を食ってから飲みながらしゃべっているから、イタリアの民主主義が維持されている、これがなくなったらイタリアの民主主義の危機だということ、おれたちは対策をとった、と言うのです。「どういう対策をとったんだ」と聞いた

ら、スイカをいっぱい買ってきて、団地の真ん中に切って並べて、スイカを食わないかとどなって歩いたと言うのです。

考えることはイタリア民主主義の危機ということでも、やることは非常に具体的なのです。「スイカ食わないか」とどなって歩いて、スイカを食いに来た人たちに、「このくらのことで外へ出られなくなったなら、イタリアの民主主義はどうなる」という訴えをやったのだという話が出てくる。

「人間らしく生きる」、「民主主義を守っていく」ということは、さきほど核の問題で言われましたが、自分たちのサイドからの要求として出てくるのだけれど、たてまえとは違う。私はやはり、これがなんとか日本で作れないかと思えますね。作

れないかというよりも、一定の闘いで克服する以外にないのだろうと思っているのです。

### 労働運動の活路

司会 そうですね。ずっと一貫して、自分の意思で参加しながら闘って、作りながらつながらっていくという方程式がみなさんから出ていると思うのです。労働運動というのは、もともとそういうものだったのではないですか。

### ●労働運動活性化の道

富沢 この前、電機労連が国際的な労働者意識調査を実施しました。あのときに、現地調査をやった外国の研究者が来たので、西欧の労働組合運動の状況を聞いたのです。

「あなたたちはどういうかたちで運動を再構築して活性化しようと考えているのか、個人的な考えも含めて言ってくれ」と聞いたら、イタリアとイギリスとフランスの研究者が共通して言ったことは、地域に根ざした労働組合運動を重要視するということ、そこに活路を見いだすということ、私も、その観点からはひじょうに重要だと思えます。

地域とは何かという問題がありませんが、一言でいえば、生活の場ということだと思えます。生活の場では人間らしい生活を作っていくという運動に、労働組合運動が結びつくことが、労働組合運動の活性化に通じる。彼らはそうとらえているのだと思います。

日本の場合も、生活防衛ということばかりではなくて、生活をどう作っていくか、ここに労働組合運動が一枚かんでいかなければいけない。いろいろな活性化の道があるかもしれないが、これは重要な一つの活性化の道だと思えます。

そのためにはどうしたらよいか。第一に、そういう観点から生活を見直すことが必要ですね。労働をふくめたかたちで、どういう方向づけで生活を立て直したらいいのかを考える必要がある。それこそ生活のベレストロイカ、生活革命というか、労働革命というか、そういうことが現時点で必要でしょう。これが第一の問題点です。

### ●前提は自然を守ること

つぎに、そういう方向から見ると、豊かな生活をつくるうえでまず重要なのは、豊かな自然を守ることだと

思えます。

昨年の一二月一日の朝日新聞の「天声人語」が、こういうことを言っています。石垣島に飛行場を造るという計画について、「県や国は空港ができたら島が豊かになると言うけれども、お金がないから貧乏だなんてだれが決めたんだらうね」。こういうことを、石垣島に住む七十一歳のおばあちゃんがおじいちゃんに言ったのです。「天声人語」は「こういう言葉は心のメモに刻んでおきたいと思う」と言うので、私もさっそくメモをしました。つまり、空港ができたら島が豊かになる、お金がないのは貧乏だといつの間にか私たちはそういうふうに見えるようになってしまっているのですね。

しかし、さきほどの私のつくった豊かさの方程式でいえば、豊かさにとつては、自然と人間関係に恵まれているというのがいちばん基本的な条件だと思えます。たとえお金がなくても、豊かな自然があって、それこそ極端な例でいえば、食べ物は何でもそのへんで食べられるとか、豊かな人間関係があって、愛したいときに愛する。そんなことができれば、それが豊かさだと言えるのではないか。自然というのは、一度失う

ととりかえしがつかない。やはり自然を守れ、と言いたいですね。これが第二点です。

### ●豊かな社会をつくる

第三点は、豊かな社会をつくれということ。社会というのは基本的に人間関係ですから、人間関係を豊かなものにしていく。これが私たち三人の今までの話の共通点で、それぞれの立場から強調されたことだと思います。

そうすると、地域生活圏のなかで、生活に直接、目に見える範囲でかわるような人間関係を豊かな人間関係に作っていくことが重要だと思ふのです。竹下首相も、ふるさと創生論を言っていますが、ふるさととというのは本来、人と人との直接的な結びつきを基礎にした地域生活圏のことではないでしょうか。

### ●労働の見直し—労働と生活の結合

四番目には、労働の見直しということを考えています。

まず第一に、労働を賃労働に限定しないで、もっと広い視野から、労働とは物を作ったりサービスをしたりにすることによって人に役立つ活動をするのだと、とらえておく必要

があります。労働は人に役立つ活動だという点がとりわけ重要。本来、労働をする人は、その労働を通して人を助け、また自分自身を人間的に発達させることができるものです。みながそのような労働をしたいと願っていると思います。ところが賃労働は、そうなっていない。資本の直接的な目的は利潤の増大ですから、場合によっては、ある労働は他人も自分も傷つけるような労働になることがあります。

人を助け自分を発達させるような労働をしたいというのは、人間の本源的な欲求です。このような欲求を要求に具体化して、賃労働を一步でも本来的な労働に近づけていく運動を、労働運動が取り組まないで誰が取り組んでくれるのでしょうか。これに取り組まないかぎり、生活の質の本質的な意味の向上は達成されないでしょう。

本来、労働は生活活動の重要な一部として、生活のなかにふくまれてくるものです。ところが、資本主義社会は労働と生活を分けてしましました。資本の側は労働と生活を切り離そうとするわけですから、労働運動の側は、これらをつなげる方向で運動を立て直す。つまり、労働者

が労働をふくめた生活活動の主體的な担い手になるという方向づけが必要だと思ふのです。

資本主義的な経営管理の特質は、

本来は構想と実行との総合としてある労働をバラバラにして、実行を構想から分離したところにあります。

考える人は資本家で、労働者はその命令に従って実行する。こうした構想と実行の分離が、労働の衰退や生活の衰退をもたらした根本的な原因だから、それを再結合させる。自分たちで考えて、自分たちが労働する。そのような労働の実現をはかる。こういう方向づけで、労働の見直しをする必要があります。

社会的な生活過程では、人間的な社会を作る活動、つまり生活協同を図っていく活動を強めることが必要です。政治的な生活過程では、あらゆるレベルでの活動の民主化が重要です。文化的な生活過程では、芸術

活動や科学的活動を通じて生活を豊かにしていく活動が必要。芸術は、人間の内面を豊かにし、感覚を豊かにすることによって、享受の能力を高めます。このようにして、豊かな生活を自分たちで広げていくわけ。科学は対象を人間のために獲得するためのよい方法を考えるてく

れます。

いずれにしろ、芸術も科学も、一般的にいえば文化というものは人間を豊かにするものだと思います。そういう活動にも積極的に参加する。このような総合的な観点から労働や活動を見直すことが重要でしょう。

### ●総合的な担い手づくり

こうした総合的な活動の担い手になる組織が労働組織だとすれば、労働運動イコール労働組合運動としてとらえる見方は不十分で、労働運動を、労働組合運動、協同組合運動、政党の運動、文化的な運動の複合体としてとらえ、それぞれが個別に活動しながら、有機的な連関性をつくりあげていく運動としてとらえる見方が重要になってくると思います。生活を総合的にとらえるためには、運動側も総合的な担い手づくりをしていく必要があるわけです。つまり、労働運動のネットワーク化です。

労働のあり方にかんして言えば、労働組合が各人の労働を、いま言ったような生活に役立つ労働として位置づけ、そういう観点から労働のあり方に対し規制を加えていく必要があると思ふ。

たとえば、イギリスでいうと、ル



「カス・エアロスベースの労働組合のように、軍需生産品を民間必需品に変えていく運動をすすめるのか、日本でいうと、どこかの食品組合がやっているように、消費者に労働組合がアンケートを出して、消費者が望ましいとしている食品を作るように経営側に要求していくとか、いろいろなやり方があると思うのです。」

つまり、労働運動側が労働と生産に規制を加えていく、国民経済の第一セクター、第二セクターではそういうことが重要だと思えます。それと同時に、協同組合セクターを拡大強化していくことが、現在、ひじょうに大切で。

私は、そのような運動をすすめるうえで一つの重要な核になりうるのが、労働者協同組合だと考えています。つまり実行可能な領域において、雇用・被雇用の関係がない労働者自主管理の企業をつくり、労働者が自分たちで企業活動を行なっていくことです。

資本主義的な社会のなかで労働者企業を存続させるのは、そもそも無理だという考えが一般的だろうと思えるのですが、いくつかの国ですで見られる成功例から教訓を得ながら、協同組合セクターを拡大強化してい

く方向を、労働運動が本腰を入れて考えていくべきではないか。そこから、労働をふくめた生活の協同をとらえ返していく必要があると思うのです。

子育ての豊かさを学ぶ

司会 生活のベレストロイカという点で、今崎さん、いかがですか。

今崎

●子育てを生活再建の柱に

いま言われた全体の線は、私もそうだと思います。今日の課題である豊かな暮らしづくりという点で、最初に問題提起したような、人間と人間のつながりを大切に、そのなかで暮らしの質を作っていくという意味からいえば、一つだけ、どうしてもイタリアから学ばなければならぬことがあります。それは子育ての問題——きわめて日本独特の偏差値競争と情報化が結び、人間らしく成長しにくいという状況のなかでの子育て・教育のあり方の問題です。学校、地域、家庭みんなで考える必要のあることです。今度イタリアに行つて、痛切な体験をしました。

西側先進国と比べた生活の充足感（項目別）  
—日本の方が満たされているかどうか

	満たされている(%)	どちらともいえない(%)	満たされていない(%)
▶「満たされている」割合が最も大きい項目			
適切な量の栄養をとること	76.2	19.4	3.9
幼稚園や保育所が近くにあって入りやすいこと	60.9	25.3	13.1
必要な診断や治療がいつでも受けられること	60.6	23.0	15.9
祭り、盆踊り、運動会など地域の行事が盛んなこと	50.5	36.0	13.1
文化遺産や史跡が大事にされること	48.6	34.3	16.4
ゴミや下水が衛生的に処理されること	42.1	25.3	32.1
失業の不安がなく働けること	37.5	35.0	27.1
公園や運動施設、グラウンドなどが利用しやすいこと	37.1	29.2	33.2
女の人が、夜、安心して道を歩けること	37.0	31.3	31.0
▶「どちらともいえない」割合が最も大きい項目			
労働間での問題が中滞に解決されること	20.4	52.8	25.4
自殺や一家心中が少なこと	9.5	48.7	40.7
収入や財産の不平等が少ないこと	14.4	44.0	41.0
親子の間の対話があり、互いに相手を信頼していること	33.4	43.6	22.2
収入が年々確実に増えること	18.6	43.5	37.1
自分の住んでいる地域をよくする時間や機会があること	16.1	43.3	39.9
生涯を通じて教養を高め、趣味を広げられること	35.7	38.3	25.5
小中学校で子どもの能力を伸ばせる教育が受けられること	31.0	35.0	33.4
▶「満たされていない」割合が最も大きい項目			
年間を通じて休みを多くとれること	15.1	26.6	57.8
子ども・老人でも車に乗りかたずに道を歩けること	17.2	26.9	55.5
能力や仕事内容が同じなら、男女によって収入に差がないこと	11.6	33.9	53.7
老後に十分な年金が得られること	14.9	33.1	51.4
能力のある人が学歴が低いことで差をつけられないこと	9.8	39.4	50.1
家族がそれぞれ自分の部屋を持つ家に住むこと	30.6	22.8	46.3
物価の上昇によって収入や財産が目減りしないこと	8.0	45.3	45.6
大学教育が意欲のある人すべてに開かれていること	24.4	33.7	40.9
持とうとすれば自分の家が持てること	31.5	32.3	35.5
図書館などひとりでも勉強できる施設が近くにあること	26.0	29.8	33.5

(出所) 「図でみる国民生活白書」(経済企画庁、1986年版)

●子どもがなぜ自殺するのか

向こうの人から、日本の子どもはどうですかと、質問された。そのときに、考えていなかったものだからとつさに、「日本を発つ前に、ちょうど横浜の並木団地の一歳の子どもの自殺の話があって、それは新聞にそうとう大きく取り上げられました。それから三日ぐらい続けてそう

いう話があつて、最後は小さくしか出ませんでした」という話をしたのです。すると、男性も女性も、イタリア語で四、五分ぐらい話をして、あとで通訳の人に聞いたら、女性たちは、「そんなことがもしイタリアで起こったとすれば、号外になります」と言ったそうです。そこでハッと思ったのは、号外になる事

件というのは、日常では起こりえない天変地異や革命や戦争のたぐいだということ。男たちは、イタリアにもまださまざまな矛盾があり、貧しさもある。貧しければ泥棒もするし、親とけんかすれば家出もする、世の中がつまらなければ麻薬も飲む。しかし、なぜ一〇歳やそこらの子どもが、学校の成績がどうのというだけのこと、まだ友達も恋人も知らないままに自らの命を絶ってしまうのか本当にふしぎだ。日本は物質的には豊かになったと言われているけれども、ヨーロッパで暮らしている商社マンなどを見ると、本当に豊かなのか疑問に思えることがある、と言うのです。

「二時間でやめておけばいい」ということは、三時間やったらよくないということ、商品を作っている企業の社長自身が語っているわけでしょう。つまり心の荒廃の問題について、われわれもふくめて、学校もマスコミも、きわめて無神経になってきている。その点については西ヨーロッパは実にデリケートですね。いま大学生協がすすめている運動のように、日本でも大学生から始めて、高、中、小、幼稚園までふくめた読書運動を展開する必要があるのではないのでしょうか。

●子どもを社会的な孤独から守る  
イタリアの場合には、一三歳、一

四歳の子どもたちを社会的な孤独から守るために、読書運動を展開しています。それから、ファミコン、コンピュータ機器についても、いきなり子どもに与えるのではなく、必ず小学校の一年生から、学校のカリキュラムで、健康管理もふくめて使わなければならない。もちろん、子どもにやる前に大人たちも勉強します。つまり、機械化に対して、こうした媒体で知識を吸収させていく。同時に、伝統的な読書については、どんなことがあっても大事にするわけです。

彼らは、読書というのは、たんに意味を受け取るだけのものとは考えていないのです。意味だけだったら、ブラウン管からでもできる。そうではなくて、自分の感性と頭脳で、三分でもいいから、子どもが寝る前に本を通して自分の抽象的な世界や夢を持たせるようにする。読めないときは、母親が読んでやってスキップを持つ。自分の感性と人間をつくっていかなければならない時間として位置づけるわけです。このところを大事にする運動を、彼らはすすめている。それも地域単位、小学校単位、人民の家単位で、徹底的にやるわけです。

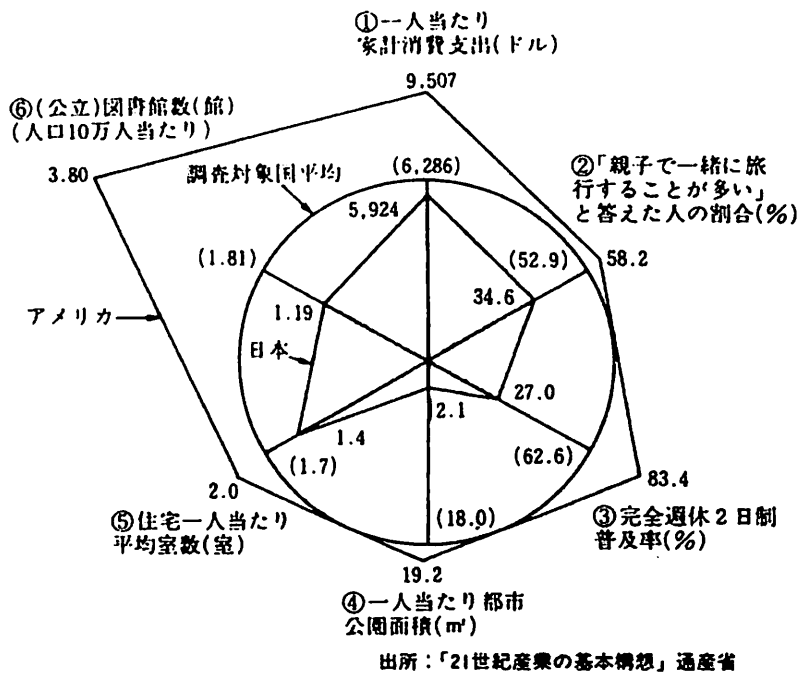
障害者もふくめて、日本の弱い部分は子どもと老人です。心の問題をふくめて、いちばん豊かさの欠けている部分、日本の貧しさ、といわれる部分は、実はここで極限に達しているのではないのでしょうか。だから学歴社会、学校格差でレッテルを貼られ差別された私立高校生たちの苦しみ、叫びを描いたジェームス三木の『翼をください』というドラマが、いますごい反響を呼んでいるわけでしょう。そのへんで、全体の課題として、人間らしく生き連帯する運動が必要なのだろうと思います。

大切なことは、イタリアでこの二〇年ほど、そのための工夫を地域ぐるみ大人ぐるみでやってきた点です。いろいろな仕掛けがあってもなおかつ、子どもが育つために大人が本気で運動している。文化も日々地域で誰もが創りだす。これを第二のルネッサンス運動と呼ぶのです。これはぜひ、高齢化社会の作り方とあわせて考えてほしい問題ですね。

●豊かさへの道筋

司会 芹沢先生、人間関係のつく

国民生活指標の国際比較



り方について、いかがですか。

どんな人間関係・ネットワークを  
どうつくるのか

●「人民の家ポロニャ」の経験

芹沢 全国一般の中部地域支部が、日本的にそれを実践しようというこ  
とで、人形町に「人民の家ポロニ  
ャ」を作ったわけですよ。三年ぐ  
らいになるのですが、やはり非常に

難しいですね。

というのは、労働者が職場のなか  
で孤独な状況におかれ、とくにあそ  
こは個人加盟になっていきますから、  
人間的ふれ合いを持てることを求  
めている。みんな飲みに行っていま

うわけですが、自分たちの城を持  
うということをやった。ところが、  
日本では「職・住」が離れている。  
今隣先生が、二時間かけて通うと言  
ったら、それじゃスイスから通って

いるようなものじゃないか、という  
話を連載第一回で書いておられまし  
たが、イタリアではだいたい近いと  
ころで働いているのです。日本で  
は、日本橋で働いていて、家は千葉  
だとか神奈川だとかでしょう。そう  
するとそういう場所を作っても、今  
度は帰るのが心配だという問題が出  
てきています。

イタリアは、やはりある意味で労  
働運動主導型ですね。この前、生活  
協同組合の配送センターへ行っただ  
ですが、職場でのサークル活動など  
はどうですかと質問したら、労働  
運動の活動家はだいたい職場が終わ  
るとすぐみんな家へ帰って、地域で  
活動しているということでした。だ  
から、労働運動の問題は、職場で活  
動をやっているのですが、それ  
以外はともかく、地域で自分たちの  
生活を作るといふことです。そうい  
う意味で、さきほども地域の重要性  
が指摘されたのだらうと思います。  
現在、板橋で地域運動を通して人  
民の家、つまりみんなが本場に集ま  
って楽しめる場所を作ろうとして、  
地域でとりくんでいるところです。  
老人の問題では、さっきスイカを  
並べたという活動家などは、地域で  
どうやってみんなが楽しく遊びをす

るかということをもものすごく大きな  
課題としてとらえている。子どもに  
何をさせるか、青少年に何をさせる  
か、婦人に何をさせるか。婦人にパ  
レーボールをやらせるとか、ボーチ  
エといっているのですが、ゲートボ  
ールと似たものもあります。スポー  
ツの課題として老人の楽しみは何で  
作っていくか、そういうことがずつ  
と地域評議会などで継続的に追究さ  
れているのです。

●明るいな金生活者の生活

さきほど富沢先生が言われたので  
すが、定年制を日本では延長、向こ  
うはむしろ早くということがありま  
すね。去年行ったとき、典型的な老  
人に二人会いました。一人は遊び人  
だと思ふのですが、アルプスに行く  
ので汽車に乗っていたときに、片言  
のイタリア語でしゃべったのですが、  
年金が一〇〇万リラ、だいたい一〇  
分の一ですから一〇万円もらってい  
る。家は持っているのですが、独身  
なのです。「山の中に、ルーレット  
の博打場がある。それをおれはこれ  
からやってくるんだ、この前は三〇  
〇万リラもうけた」とか、さかんに  
言っているのです。彼に言わせると、  
そこへミラノから日本商社マンが来

てほしい金を置いていく。日本人がいったい置いていってくれるんで、おれなんかもうけるんだ、と(笑)。

初めてイタリアへ行った人が、日本の年金生活者と非常に違うという感じを持って帰ってきた。明るいというのです。年金生活という、日本は何か、終わって引退してという感じですね。ところが向こうの人はものすごく生き生きしている。帰りに汽車のなかでさきほど話した方とまたいっしょになって、「どうした」と言ったら、「もうかった」と言っていて、もう酔っ払って真っ赤な顔をしていました。

それからもう一つは、人民の家とか、あの種の運動を支えている人には、年金生活者が非常に多いということです。年金生活者が労働組合に組織されているわけですね。ポローニャの地域労働者評議会で一五万のうち七万が年金生活者だということから、年金生活者がみんな労働組合に入っている。そのなかで、地域のボランティア活動をする。うっかり稼いで年金を取られるよりは、ただで地域のために働く。そういう人たちがみんな人民の家などで生き生きと活動している。

やはり日本の今後の高齢化社会で

もそこを考えなければならぬ。ただ、家の問題がありますね。ポローニャの駅のそばの広告を見たら、家が一軒、一億六〇〇〇万リラだった。一〇分の一にすると、一六〇〇万円でしょう。ヒデとロザンナのロザンナが、日本の三倍の家に住んでいるというけれども、一軒、でっかいやつがほしい一六〇〇万円出すと買える。これは確かに、定年退職後はイタリアへ行って家を買って住んだほうがいい。

日本テレビを退職した人が行って去年、フィレンツェで会ったのですが、定年退職後で、年金を送金してもらっている。「私は一〇〇万リラであげるようにしています」と言うのです。一〇万円ちょっとですね。学校へ行って、家を一軒借りて、飯を食って、ちゃんと暮らしている。ところが日本で一〇万円で生活するというとそうはいかない。そういう意味ではやはり社会的な条件もつくらないとだめだと、つくづく思いますね。それと、医療がただというのも、ちょっと驚異ですね。

司会 いろいろからなのですか。  
芹沢 一九八〇年にイタリアは医

#### ●医療費無料の体制

療改革をやったはずですよ。イタリア共産党の書記長だったベルリンゲルの弟さんというのがローマ大学の衛生学の教授で、イタリア共産党の上院議員なのですが、最初に行ったときに半日、イタリアの医療改革の話聞ききました。そのときには保険を聞きまして。そのときには保険を聞きまして。そのときには保険を聞きまして。そのときには保険を聞きまして。

ただ、非常にイタリア的で、医者  
は午前中、公的な病院に勤めて、午後は自分でやれるわけです。飛行機のなかで隣り合った女性が言っていたけれども、公的な病院に行くと、腹が痛いと言っても触る前から大丈夫だ、大丈夫だといって見てくれない。そのドクターがブライベートのクリニックへ行くと実によく見られるけれども、こっちは金を取られる(笑)。南部と北部とはだいぶ違うみたいです。ナポリとか、南へ行けば行くほど、制度はあるけれども有名無実にされている。北へ行けばそうではないというのがあるようですよ。ともかく、日本に作りたすけですね。手作りの楽しみね。

司会 小豆沢病院などは、糖尿病の会とかいろいろな患者の会ができていますね。

芹沢 日本にもあるのですよ。老人クラブに行つてごらんさない。地域でいま、ゲートボールの会とか、ものすごくいっぱいありますよ。今はだいたい上から組織されているのですが、あれば楽しんでる。私は浦和に住んでいるのですが、浦和だつて住民によってつくられた市民大学という年間を通して活動している立派な組織もあります。ほとんどは市民講座というような市が組んだものです。ただ、それと人民の家との違いというのは、だれかが作って参加してくれというのではなくて、自分たちで作るところです。そこが決定的なのではないかと思えます。

今崎 それとカルチャーセンターみたいな、お金を出してやるといふものとかね。

芹沢 商業主義で作られてきているのとか、自治体の作ったものとか、いろいろありますね。

#### タテ型からヨコ型へ

司会 労働組合の活性化も、自分でというのが大事ですね。

●文化協同組合による仕事おこし

今崎 人民の家で自主的に文化をつくることに関連して、イタリアで地域の域における文化の協同あるいは、生産協同組合の一つとしての文化協同組合による仕事おこしのことも申しあげておいた方がいいように思います。さきほどの、二年の間に会館を利用して、ダンスパーティーを開いたりして、七人の職員が生まれた例に見られるように、まさに地域生活の必要から、遊びであれ、高齢者のための助けあいであれ、子どものキャンプであれ、みんな自主的な仕事にし、必要あれば、文化の協同組合をつくって、自治体から予算もらうこともするわけです。

司会 その文化の協同、そして、地域の仕事おこしは日本でも始まっているようにききますが……。

今崎 そうです。かながわ生協で、建築業者と組合員が提携して、家の修理とか新築をするとか、各地の生協が農家、農協との間の産直をすすめるとか、また、音楽家や児童演劇の分野でも、生協の組合員と提携して、仕事をするとも広がっています。

司会 大切なことは、自主的に人間関係をづくり、文化をつくり、仕事もつくりだすということですね。

今崎 そうですね。すでに、日本でも各地でさまざまな、生活の協同、文化の協同の実例が育ち、子育て協同とか、暮らしの助けあい協同とか、新しい暮らしづくり、地域コミュニティづくりの状況がまさに自主的に作りだされてきていると思います。

### ●組織と組織、個人と個人を結びつける

富沢 今までの話との関連でまとめると、労働者はいまこそ縦のものを横にすべきだと私はいいたいのです。つまり、日本は縦割り社会でしょう。労働運動も縦割りになっていくのです。企業別組合という組織を見れば一目瞭然です。自分の集団は大切にすけれど、ほかの集団のために尽くすということになると、集団のなかから文句を言うのが出てくる。

文句を言われてもいい。坂本龍馬のような人がもつとたくさん出て来て組織と組織を結び付ける。個人と個人を結び付ける。労働運動は縦のものを横にすることをいま、すべきだという気がします。労働運動が依拠する「数の力」を下からつくりあげていくということは、そういうことではないのですか。

西欧の人が日本に来て、「豊かになったというけれども、みんな憂うつそうな顔をして歩いている」とよく言うのです。「なぜそんな顔をして歩いているのか、おまえはいつも愉快そうだ」と言うのだけだ(笑)。

今崎さんが言われたように、豊かな国だけ子どもの自殺がある。去年なんか九百何十人ですね。それから子どもだけではなくて、昭和一〇年前後に生まれた私の年代なんか、若いころに非常に自殺率が高かった。生き残った人たちも今ごろ、四〇代、五〇代になって自殺率が高い。だいたい二〇年前に比べると、二倍近いぐらいの自殺率になっていくでしょう。それから老人の自殺もそうですね。豊かな社会で自殺が起こるといふのは、おかしなことですね。多くの場合、人間関係が原因で自殺が出てきているわけでしょう。

自殺までいなくても、精神障害者が増えています。身近な例をとると、大学生で新入生の一四％ぐらいが精神障害者だといわれています。社会に出るのが嫌だということで留年が多いのですが、三年も留年すると、約四五％の人が精神障害者だといわれていますね。なぜかというところ、子どもから勉強、勉強で、横と

のつながりとか先輩・後輩関係というような人間的な関係が稀薄になつたために、「人間力」が低下してしまっている。大学のカウンセラーに言わせると、「人間力」というのは、基本的には「耐える力」「創造する力」「自己決定の力」だそうです。本来、人間に備わっているような力が低下している。そういうことが原因になって精神障害を起こしている。

朝日新聞の一月一六日の「今日の問題」というのを見て、面白いなと思ったのですが、寄席へ行く高校生や大学生が増えたのです。ここでは話の内容よりも、オーバーアクションの漫才なんかを受けている。藤本義一さんの分析によると、友達同士のコミュニケーションがないから元気のいい仲間のように映る芸人に引き寄せられていくのだということです。コンパもこのごろは、学生同士が話し合うということが嫌いになつているので、できるだけ話し合いができないようなところをコンパ会場に選ぶ。つまり、プライベートに深入りされたくない学生が増えていく。会社員になると、今度は。カウチポテト族、というのが増えているのだそうです。カウチというのは寝椅子でしょう。家へさっさと帰って、

カウチに横たわってテレビを見て、ポテトチップスをかじりながら一杯飲む。寂しいものですよ。

そういうように人間関係が稀薄化・無機化していることが自殺とか、陰鬱な顔をして歩くとか、そういうところに結び付いていると思うのです。

### ●人間力、を回復させる

そういうものを進ませているのは、一般的に言えば資本関係だと思えますから、それを野放図にしておけばさらに進んでしまうわけです。それに対抗する力は、基本的には労働運動にあるわけだから、労働運動がそれをチェックしないといけない。そういう意味合いでは、労働運動が縦横のものを横にするということ、たんに労働者の数の力を増大させるという、量の問題だけではなく、根源的な「人間力」を回復させるという、質の問題に深くかかわっています。労働運動がそうしないと、自由、平等、友愛という、近代社会の三大原理のうちの自由と平等だけが先行してしまふ。そして自由と平等が経済原理である競争に結び付くと、早いもの方がいいという価値観が第一になつてしまふ。経済の問題は結局は時間の問題で、早いもの勝ちというこ

とです。早いものがいいということになると、それこそ時間についてのゆとりがどんどんなくなっていく。金はあっても時間的なゆとり、心のゆとりがなくなっていく。この進行を労働運動がチェックすることが必要だと思ふのです。

その場合、とくに労働組合運動でいうと、本音で時短要求ができるようにするにはどうしたらいいかというのが基本問題です。そのためには、余暇のための時短要求というだけでは不十分です。その時間に何をするかその活動が生きる喜びに通じるもの、これをやりたいという欲求を強めるような活動がないと、時短要求が本音の欲求にはなつてこない。

### ●人間関係づくりに時間を使う

その場合、きょうの話し合いから出てきた大切な点は地域づくりというか、人間関係づくりというか、そういうところに活動を結び付けていくということですね。そういう友愛関係、連帯関係、協同関係、あるいは生活の協同、そういうものを作っていく活動に、その時間をあてていく。つまり、時短要求が人間的な欲求に結び付くということが必要ではないかと思ふます。

私は医学の分野はよくわかりませんが、大脳生理学で言うと、人間の基本的な本能は、食欲と性欲と集団欲なのだそうです。さっき出た「マジンジャー・アマール・カンターレ」も、それに対応するような気がしますね。つまり、食欲とか性欲というようなものの充足の仕方を、集団欲の人間的な充足のなかでやっていく。

日本人は何かが褒められるのが恥みたいな感じがあって、これまたいけないと思うのです。褒められるようなことをどんどんやればいい。褒められて素直に喜べばいいのです。集団欲の人間的な充足というのは、そういうことでしょう。

では、集団欲をどうやって充足させるのか。そのためには、カウチポテト族ではだめなんで、集団欲の人間的な充足の仕方、つまり協同を労働と生活のあらゆるレベルですすめていく。労働組合運動、協同組合運動、政党運動、それから文化運動が、それぞれ相互に連帯しながら、協同を強めていく。労働運動のネットワークを拡大強化していく。こういうブランドブランが労働運動側に必要ではないか。労働組合運動も、このような協同の運動の一環として労働組合運動を位置付けていく。今後、ま

ますます重要な社会的課題になるであろうと予測される、生活の質の向上という問題にこのようなかたちで対応することが、これからの労働運動の重要な課題ではないかという気がします。

### 司会 人と人、あるいは組織と組織を結んで、職場もそうだけれど、

地域、あるいは家庭の場で、協同して生きていこうじゃないか。時間をそのことの実現・充実に使うために時短を要求したり使っていく。組織されている人も、組織されていない人も、そのことを生活の質の課題として追究していくということで、だいたい共通した意見が出たと思ふます。

これを機会に、何人かゲストを呼んで現代の真の豊かさ、人間らしさを実現していく展望を語りあってみたらどうかということも、考えていくたらしと思ふますので、今日のところはこういうかたちで終わりたいということにしたいと思います。たいへん面白く話を聞かせていただきしました。どうもありがとうございます。